

香川県観音寺市（国内3例目）の高病原性鳥インフルエンザ発生農場に係る
疫学調査チームの現地調査概要

令和4年11月1日に実施した現地調査により、以下のことを確認した。

1 農場の周辺環境

- ① 当該農場は山の辺縁部分にあたる平野に位置し、農場周辺には複数のため池や田畑が存在した。また、鶏舎間を横切るように国道が通っており、交通量も多かった。
- ② 発生鶏舎はため池に隣接しており、当該ため池にはカモ類（カルガモ54羽、ヒドリガモ13羽、ハシビロガモ8羽）のほか、オオバン11羽等の生息が確認された。そのほかの農場周辺のため池では、ホシハジロが多く確認された。カモ類が全く確認されなかったため池もあり、発生鶏舎周辺のため池におけるカモ類の種構成について共通した傾向は見られなかった。

2 通報までの経緯

- ① 飼養管理者によると、過去1週間の1日当たりの死亡鶏は全鶏舎合わせて1～5羽程度で推移していたとのこと。
- ② 発生鶏舎は高床式の開放鶏舎で、採卵鶏（通報時560日齢）が4段ケージで飼養されていた。前日まで特段の異常がなかったところ、10月31日朝の健康観察時に50羽が死亡しているのを発見したため、家畜保健衛生所に通報したとのこと。死亡は鶏舎の入口に対して奥側（ため池側）で見られ、特に上段に多かったとのこと。
- ③ 疫学調査時も、通報時と同様に奥側の複数列で死亡や沈鬱、チアノーゼ等の症状を示す鶏が多数確認された。発生鶏舎以外の鶏舎では異常は認められなかった。

3 管理人及び従業員

- ① 当該農場では社員4名とパート職員2名の計6名の従業員が勤務しており、このうち飼養管理は社員4名が担当していた。パート職員2名は集卵作業のみ担当していた。
- ② 各従業員は基本的に担当する鶏舎が決まっているとのこと。

4 農場の飼養衛生管理

- ① 農場（各鶏舎）の出入口に消毒ゲートはなく、隣接する道路や田畑と農場の境界に柵等の物理的な障壁は設置されていなかった。
- ② 来場車両が農場に入る際は、衛生管理区域外の倉庫に設置された動力噴霧器により車両消毒を実施した後、公道を通過して各鶏舎に移動していたとのこと。従業員が鶏舎間や堆肥処理施設等の場内施設間を往復する際には、必ずしも車両や重機の消毒は実施していないとのこと。飼養管理者によると、日常的に農場入口への石灰散布を行なっているとのこと。
- ③ 飼養管理者によると、従業員はそれぞれ自宅で農場内専用作業着及び長靴を着用した状態で鶏舎に向かい、鶏舎に立ち入る際には、鶏舎専用の長靴への履き替えや更衣、手指消毒は行なっていなかったとのこと。踏込み消毒槽は全ての鶏舎で設置されていた。集卵場については、従業員は専用の靴に履き替えていたとのこと。
- ④ 飼養管理者によると、来場者は鶏舎内には立ち入らない飼料業者と集卵業者のみであり、来場者用の衣類や長靴は準備されていなかったとのこと。集卵場入口には踏込み消毒と手指消毒用スプレーが設置されていた。
- ⑤ 鶏舎単位で同一日齢の鶏が飼養されており、調査時には日齢の異なる3ロットの成鶏が3鶏舎（開放2鶏舎、ウインドウレス1鶏舎）で飼養されていた。
- ⑥ 開放鶏舎は基本的には自然換気とし、気温に応じて換気扇を使用していた。また、ロールカーテンを開閉することにより温度調節を行っていた。

- ⑦ 鶏舎ごとにオールイン・オールアウトを行っており、オールアウト後は除糞、鶏舎の洗浄消毒を実施しているとのこと。
- ⑧ 飼料タンク上部には蓋が設置されており、鶏舎内のラインを通して自動で給餌できる構造となっていた。
- ⑨ 飼養鶏への給与水は、発生鶏舎のみ井戸水（消毒なし）を用いており、発生鶏舎以外は市水を用いていたとのこと。井戸には蓋がされていた。
- ⑩ 鶏糞は、高床式開放鶏舎では2か月に1回程度、1階部分に堆積した糞を重機で除去し、自社トラックで400メートルほど離れた自社の処理施設へ搬出していた（発生鶏舎からの最後の搬出は通報の1週間程度前）とのこと。ウインドウレス鶏舎では鶏舎横のピットに一時的に堆積した後に、同様に処理施設に搬出していたとのこと。鶏糞は1年間ほどかけて完熟させ、完成した鶏糞肥料は耕種農家から購入希望があれば、販売・散布を行なっているとのこと。
- ⑪ 飼養管理者によると、死亡鶏は飼養管理時に回収し、衛生管理区域外の車庫内の冷蔵庫で保管しており、週1回化製業者が回収しているとのこと。
- ⑫ 廃鶏は、オールアウト時に1週間程度かけて食鳥処理場に出荷しているとのこと。
- ⑬ 開放鶏舎で生産された鶏卵は手作業で集卵し、各鶏舎から直接集卵車に積載してGPセンターに出荷しているとのこと。ウインドウレス鶏舎では、鶏卵は自動集卵され、附帯する集卵場で洗浄・検卵・計量を行なった後に、当該農場専用のトレーで出荷しているとのこと。
- ⑭ 定期的に農場を訪問する管理獣医師はいないとのこと。

5 野鳥・野生動物対策

- ① 飼養管理者によると、高床式鶏舎の1階部分に逃げた鶏を狙ってタヌキが金網の破損部から侵入することがあり、破損を確認した場合は修復しているとのこと。調査時に、発生鶏舎横の柿の木の下に、タヌキのものと思われる糞の堆積を確認した。また、鶏舎周囲で野良猫を見たことがあるほか、鶏舎内でスズメを見かけるとのことで、調査中も鶏舎内へのスズメの侵入が見られた。
- ② 使用中の開放鶏舎については全ての窓や開口部に金網（目の大きさは3.5 cm程度）が設置されていたものの、発生鶏舎の天井付近や1階の壁や金網に中型哺乳動物が通過可能な大きさの穴が開いている箇所が複数見られた。
- ③ 発生鶏舎内にはネズミの糞と思われるものや齧り痕を確認したが、生きたネズミや死体は認めなかった。飼養管理者によると、殺鼠剤を散布した結果ネズミが減ったとの印象を持っているとのこと。